

The Shuisho's Inheritance in the Goshuishu : A Comparison of Waka by the Common Poets

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-01-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: NAKA, Shuko メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/3897

BY-NC-ND

『後拾遺和歌集』における『拾遺和歌集』の継承

―共通する歌人詠の比較を中心に―

学芸学部 国文学科 中 周子

要旨…第四番目の勅撰集である『後拾遺集』は、古写本の題名および序文には『後拾遺和歌抄』とあることから、古来『拾遺集』よりも、その前身である『拾遺抄』を重んじて継承する集であるとの見方が行われてきた。しかし、『後拾遺集』と『拾遺抄』および『拾遺集』との内容的な影響関係についての考察は十分には行われてこなかった。そこで『後拾遺集』と『拾遺集』との関係を、具体的な和歌表現の比較・分析によって明らかにすることを試みた。まず『後拾遺集』が『拾遺集』の歌人を重視していることを指摘し、両集に共通する歌人の和歌を比較考察した。その結果、両集に類似する表現が多いこと、さらに『後拾遺集』撰者が、『拾遺抄』の歌のみならず『拾遺集』が増補した歌とその表現に注目していたことを明らかにした。本論は『後拾遺集』は『拾遺集』を継承発展させるといふ編纂方針を持った集であることを論証した。

キーワード…『拾遺集』、『拾遺抄』、『後拾遺集』、能宣、好忠

1、はじめに

第四の勅撰集である『後拾遺和歌集』（以下『後拾遺集』）は、前代の『拾遺和歌集』（以下『拾遺集』）を意識した名称といえる。

しかし、『後拾遺集』という題名は後世のもので、『後拾遺集』の古写本には『後拾遺和歌抄』とあり、仮名序にも「名づけて後拾遺和歌抄といふ」と記されている。しかも、平安時代には『拾遺集』の前身ともいえる『拾遺抄』が尊重されていたこともあって、藤原定家の『三代集之間事』に「通俊卿撰後拾遺之時、雖立二十巻之部。猶名後拾遺和歌抄、是猶庶幾抄名也」¹⁾と記された。それ以来、『時の人集（『拾遺集』）をさし置きて、抄（『拾遺抄』）をもてなしけり。乃通俊卿後拾遺も集にはつかずして、抄につきて後拾遺抄と題せり」（『井蛙抄』²⁾）等の見方が多く伝わっている。『古来風牀抄』や『東常縁聞書』等にも同様の説が受け継がれている。一方、「抄」と「集」の区別は厳密ではなかったと思える例が存する。『紫式部日記』には、二十巻の『拾遺集』を『拾遺抄』と記しているの

である。

かつて『後拾遺集』が、『拾遺抄』と『拾遺集』のいずれを継承するのかという問題が、単に題名の問題にとどまらないことを論じたが、本論では、この問題を両集の共通歌人詠を比較検討することによって明らかにしたい。比較に際して、『後拾遺集』の仮名序に「古今後撰二つの集に歌入りたるもがらの家の集をば：これに除きたり」と記されている点、すなわち、古今後撰の両集に入集した歌人の家集からは採歌しないが、『拾遺集』歌人の家集からは採歌するという方針に注目することにする。『後拾遺集』の撰者通俊は、『拾遺集』初出歌人の家集を前に、『後拾遺集』の歌を除きつつ撰歌作業を進めたと考えられるからである。通俊は、おそらく歌人ごとに、『拾遺集』入集歌と『後拾遺集』撰出歌とを見比べたに違いない。両集に共通する歌人の和歌を中心に比較することで、『後拾遺集』が『拾遺抄』および『拾遺集』を如何に意識していたかが明らかになるう。

例えば、浅茅は『古今集』『後撰集』では恋歌の比喩として用いられていたが、『拾遺集』になると四季歌の歌材となり、『後拾遺集』の四季部においては秋の代

表的な景物の一つとなっている。このことを浅茅という歌材のみならず、歌人に注目すると、『拾遺集』の四季歌に浅茅を詠み込んだ唯一の例が恵慶の歌であり、『後拾遺集』秋部にも恵慶の浅茅詠が撰ばれていることがわかる。また、家集を見ると恵慶は何度も浅茅を詠んでいる。しかも、恵慶の例は、浅茅を四季の歌に詠む早い例である。『拾遺集』はそのような恵慶の浅茅詠に注目して四季部に採録した。そして『後拾遺集』もまた、恵慶の浅茅の歌を撰んで秋部に配し、さらに他の歌人達の浅茅詠をも採録し、浅茅を秋の重要な景物として位置づけたのである。

この例が示唆するように、両集に共通する歌人の詠歌に注目して比較することによって、『後拾遺集』における『拾遺集』継承の具体相を明らかにしようと思われる。そのような観点から、本論では両集に共通する歌人の詠歌を取り上げて、『後拾遺集』と『拾遺抄』および『拾遺集』との関わりを考察する。

2、『後拾遺集』に入集する拾遺集歌人

具体的な和歌の分析に入る前に、まず『後拾遺集』における『拾遺集』歌人の占める比重を見ておこう。次は『後拾遺集』の歌人総数と『拾遺集』既出の歌人、『後拾遺集』初出歌人の数、および、それぞれの歌数を比較したものである。

『後拾遺集』入集歌人総数	三三一名	総歌数	一一二八首
『拾遺集』既出歌人総数	三三名	総歌数	三九五首
『後拾遺集』初出歌人総数	二八八名	総歌数	七六四首

『拾遺集』既出歌人の数は全体の約一割にすぎない。しかし、その歌数は総数の約三割を占めている。既出歌人一人あたりの入集歌数は初出歌人よりもはるかに多いことがわかる。この傾向は、『後拾遺集』の特色といえるかどうかを知るために、『後撰集』と『拾遺集』が、前代勅撰集歌人の和歌を何首撰んでいるかを表に比較してみると、次の通りである。なお、『拾遺集』における前代歌集には『万葉集』を含めた。

『後拾遺集』入集歌数	『拾遺集』既出歌人	『後拾遺集』初出歌人
一〇首以上	一五名	一名
九〇五首	九名	二四名
四〇二首	六名	九四名
一首	三名	一五九名
『後撰集』入集歌数	『古今集』既出歌人	『後撰集』初出歌人
一〇首以上	八名	三名
九〇五首	一名	八名
四〇二首	一五名	四六名
一首	八名	一一一名
『拾遺集』入集歌数	前代集既出歌人	『拾遺集』初出歌人
一〇首以上	八名	七名
九〇五首	九名	八名
四〇二首	一八名	二九名
一首	二〇名	九一名

このように、他の勅撰集における前代歌人の比率を比べてみても、『後拾遺集』における『拾遺集』歌人の比重の大きさ、一〇首以上入集する歌人の多さがわかる。前代歌人の詠歌を重んじる傾向は『後拾遺集』の特色であるといえる。

次に『後拾遺集』に撰ばれた『拾遺集』既出歌人三三名と、その入集歌数および部立ごとの歌数を一覧してみることにする。『拾遺集』歌人といっても、『拾遺集』成立後に、むしろ長い活躍時期を持つ歌人も少なくない。そこで、『拾遺集』の成立時に生存していたかどうか、あるいは『後拾遺集』成立以後の時代も活躍時期とする等により二分してあげた。なお、○印は『後拾遺集』入集歌数、◎印は『拾遺集』入集歌数である。また()内には各部立ごとの歌数を示した。ただし春夏秋冬は「季」、雑春と雑秋は「雑季」として一括した。

(A) 『拾遺集』成立時に没している歌人

能宣……○二六(季一九、恋四、雑二、旅一)◎五六(季一七、雑季八、恋六、

雑恋一、雑七、賀八、別四、神楽八、哀傷二)

元輔……〇二六(季一、恋六、雑五、賀二)◎四八(季九、雑季一〇、恋三、
 雑恋一、雑六、雑賀七、賀四、別一、物名一、神楽三、哀傷二)
 兼盛……〇一七(季一〇、恋三、雑一、賀三)◎三八(季一四、雑季三、恋四、
 雑一、賀四、別三、物名一、神楽六、哀傷三)
 重之……〇一四(季三、恋二、雑六、賀一、旅一、哀傷一)◎二三(季五、
 雑季一、恋二、別一、物名二、神楽一)
 実方……〇一四(恋三、雑八、哀傷三)◎七(季一、雑季一、恋四、哀傷一)
 道信……〇一一(季一、恋七、雑一、別二)◎二(哀傷二)
 恵慶……〇一一(季五、恋一、雑三、別一、旅一)◎一八(季一〇、雑季一、
 雑恋一、雑三、物名一、神楽一)
 好忠……〇九(季七、恋一、雑一)◎九(季二、雑季四、恋一、雑一、別一)
 道綱母……〇七(恋二、雑五)◎六(季一、恋一、雑一、雑賀二、哀傷一)
 微子……〇七(季二、雑五)◎五(雑三、恋一、雑賀一)
 義孝……〇七(恋一、雑二、哀傷四)◎三(雑季一、雑賀二)
 兼家……〇四(恋三、別一)◎二(雑二)
 順……〇三(雑一、賀一、哀傷一)◎二七(季七、雑季二、恋五、雑恋一、
 雑二、賀一、別一、哀一)
 安法……〇二(季一、雑一)◎三(季一、雑季一、神楽一)
 為頼……〇二(季一、雑一)◎五(季一、雑二、別一、哀一)
 朝光……〇二(雑一、哀一)◎四(雑二、雑賀一、哀傷一)
 具平……〇二(季一、雑一)◎四(雑季三、雑一)
 貴子……〇二(恋一、雑一)◎一(雑賀一)
 望城……〇一(季一)◎一(季一)
 (B)『拾遺集』成立後にも活躍した歌人
 和泉式部……〇六八(季一七、恋二二、雑三三、旅一、哀傷五)◎一(哀傷二)
 赤染衛門……〇三二(季八、恋五、雑一三、賀二、別一、旅一、哀傷二)◎一
 (別一)
 道濟……〇三二(季九、恋四、雑四、別三、旅二)◎一(雑一)
 長能……〇二〇(季九、恋五、雑五、別一)◎七(季三、雑季三、雑恋一)

公任……〇一九(季八、恋一、雑八、賀一、別一、旅一)◎一五(季三、
 雑季五、雑一、雑賀二、別一、哀傷三)
 輔親……〇一三(季一、恋四、雑六、賀一、別二)◎一(雑季一)
 馬内侍……〇一二(季一、恋三、雑八)◎四(雑季一、恋二、雑一)
 嘉言……〇一〇(季四、恋一、雑二、別一、賀一、哀傷一)◎三(雑季一、
 雑一、別一)
 高遠……〇八(季三、恋一、雑二、旅一、哀傷一)◎一(秋一)
 選子……〇七(季一、雑四、別一、哀傷一)◎一(哀傷二)
 兼澄……〇七(季二、恋一、雑一、賀二、別一)◎一(神楽一)
 小大君……〇五(季一、雑三、賀一)◎三(雑季一、恋一、雑賀一)
 道長……〇五(季二、雑三)◎二(雑季一、雑賀一)
 相方……〇一(雑一)◎一(哀傷一)
 頼光……〇一(恋一)◎一(恋一)

(A)の拾遺集時代の歌人は十九名で、(B)の後拾遺集時代に活躍した歌人よ
 り多い。また、一首歌人はわずかに三名で、大半の歌人は数首以上の歌が撰ばれ
 ていることから、『後拾遺集』が拾遺集歌人を重視する傾向が明らかである。
 『後拾遺集』の歌風形成においても拾遺集歌人の詠歌が大きな役割を果たしてい
 るであろうことが予測されるのである。

3、共通歌人の類似表現

『拾遺集』と『後拾遺集』に共通する歌人の歌を比較してみると、同じ発想や
 歌材、類似の歌句が用いられた歌が少なからず撰ばれていることに気づく。もち
 ろん同一歌人の歌であるから、同じ発想や類似の歌語・表現が用いられているの
 は当然ともいえよう。しかし、以下にあげる例は、『後拾遺集』の撰者が、『拾遺
 集』を如何に意識していたかを窺い得る例と考えられよう。詠み込まれた歌こと
 ばを詳細に見ると、『後拾遺集』の先例が、『拾遺集』に初出例として見当たり、
 しかも他にはほとんど例がない表現が少なくない。

① 能宣の和歌

a もみぢ葉をけふは猶見むくれぬともをぐらの山の名にはさはらじ

(拾遺集・秋・一九五・能宣)

もみぢせばあかくなりなむをぐら山秋まつほどの名にこそありけれ

(後拾遺集・夏・二二三・能宣)

b 女郎花にはふあたりにむつるればあやなくつゆや心おくらむ

(拾遺集・秋・一五九・能宣)

梅の花にはふあたりのゆふぐれはあやなく人にあやまたれつつ

(後拾遺集・春上・五一・能宣)

c わがやどの梅のたちえや見えつらん思ひのほかに君がきませる

(拾遺集・春・一五・兼盛)

梅がかをたよりの風やふきつらん春めづらしく君がきませる

(後拾遺集・春上・五〇・兼盛)

d 山里は雪ふりつみて道もなしけふ来む人をあはれとは見む

(拾遺集・冬・二五一・兼盛)

雪ふりて道ふみまどふ山里にいかにしてかは春の来つらん

(後拾遺集・春上・七・兼盛)

③ 藤原公任の歌

e 春きてぞ人も訪ひける山里は花こそやどのあるじなりけれ

(拾遺集・雑春・一〇一五・公任)

山里の紅葉見にとや思ふらん散りはててこそ訪ふべかりけれ

(後拾遺集・秋下・三五九・公任)

④ 大斎院選子の歌

f ごふつくすみたらし河の亀なればのりの浮き木にあはぬなりけり

(拾遺集・哀傷・一三三七・選子)

のりのため摘みける花を数々に今はこの世のかたみとぞ思ふ

(後拾遺集・哀傷・五七九・選子)

⑤ 曾禰好忠の歌

g には鳥の氷の関にとぢられて玉もの宿をかれやしぬらん

岩間には氷の楔うちてけり玉ぬし水も今はもりこず

(後拾遺集・冬・四二一・好忠)

(拾遺集・冬・一一四五・好忠)

①にあげた能宣の家集は田融、花山の御代に二度にわたって召されており、『紫式部日記』にも、道長から彰子への贈り物の冊子として、三代集と「能宣、元輔やうのいにしへいまの歌よみどもの家々の集」⁶⁾があったと記されている。能宣が重代の歌人として高い評価を得ていたことが窺われよう。『拾遺集』には能宣の歌が五九首入集しており、初出歌人中では最多である。『後拾遺集』仮名序には、能宣はじめ『後撰集』撰者をまとめて「むかし梨壺の五つの人といひて歌にたくみなるもの」と評価しているが、五人の入集歌数にはかなりの隔りがある。因みに能宣と元輔は二六首、順は三首、時文二首、望城は一首である。能宣と元輔の二人を重視していることがわかる。また、『拾遺集』『後拾遺集』ともに能宣の四季歌を多く撰んでいる。この点をみても両集の撰歌傾向が似通っていることが窺えるのである。

能宣のb歌に詠み込まれた「にはふあたり」という表現に注目すると、能宣以前には例が見出せないことがわかる。かろうじて、次の類似例が見つかるのみである。

咲きにほふ花のあたりのつねよりもさやけかりけり秋の夜の月

(内裏前裁合・五)

千種にほふ花のあたりにはもぎ木のやうにてまじりにくく侍れども…

(女四宮歌合・歌合日記)

前者は康保三年(九六六)に開催された村上天皇の「内裏前裁合」において朝成朝臣が詠んだ一首である。「咲きにほふ花」と秋の「月」とを組み合わせており、月を鑑賞しながらの前裁合にふさわしい歌となっている。同じ折りの歌に「月かけのさやかならずは秋ふかみ千種にほふ花を見ましや」(一七)もある。この「にはふ」は視覚的な意味であろう。

後者は、散文ではあるが、天禄三年(九七二)八月に行われた「女四宮歌合」

の歌合日記中の一文である。秋の野に咲き乱れる花々という視覚的なイメージを伴う意味で用いられている。

さらに「にほふあたり」という表現は能宣の和歌には何度も詠み込まれている。

屏風に、大井河に、人人のいへあり、前裁のもとに人人などゐて
はべるに

女郎花にほふあたりにむつるればあやなくつゆやこころおくらん

(能宣集・二二二)

人のもとにまかりてもなどいひて、女郎花ををりて簾の内にな

し入るとて

女郎花にほふあたりの野をしめて秋のよなよな旅寝をぞする

ある人の歌合に むめ

梅の花にほふあたりのゆふぐれはあやなく人にあやまたれつつ

(同・二六三)

能宣はよほどの表現が気に入っていたのであろう。屏風歌や歌合歌として、また実生活での贈答歌として、さまざまな場面で詠じている。一首目が『拾遺集』に、三首目が『後拾遺集』に撰ばれている。この二首を見ると、まず「女郎花」と「梅の花」との相違がある。小町谷氏は一首目の拾遺集歌を「女郎花が色美しく咲いている辺り」と視覚的な意味に取っておられる。確かに、次の例歌のように女郎花は色美しく咲く様子が詠まれることが多い。

女郎花にほふさかりを見る時ぞ我が老いらくはくやしかりけり

(後撰集・秋中・三四七・読人不知)

ここにしも何にほふらん女郎花人の物言ひさがにくきよに

(拾遺集・雑秋・一〇九八・遍昭)

後の例ではあるが、『源氏物語』匂兵部卿の巻には、香の有無によって、梅の花と女郎花を対比的に記した条がある。すなわち、生まれつき芳香を身にまとう薫への対抗心から、薫物の調合に熱心な匂宮について「御前の前裁にも、春は梅

の花園をながめたまひ、秋は、世の人のめづる女郎花、小牡鹿の妻にすめる秋の露にも、をさをさ御心うつしたまはず」と描かれる箇所である。梅の花を好み女郎花には見向きもしないというのであるから、女郎花はさほど香りのない花と認識されていたのである。ところが、次のような歌がある。

手にとれば袖さへにほふ女郎花この白露に散らまくをしも

(万葉集・卷十・二二一五)

女郎花ふきすぎてくる秋風は目には見えねど香こそしるけれ

(古今集・秋上・二三四・躬恒)

女郎花にほひを袖にうつしてばあやなく我を人やとがめむ

(貫之集・二八九)

『万葉集』の一首は、女郎花の美しい色が袖を染めると解されるが、『古今集』では明らかに女郎花の香が詠まれている。貫之の歌は、『万葉集』を踏まえながら、香を詠んでいる。おそらく貫之は「袖さへにほふ」を移り香と解したのであろう。そして、『拾遺集』が採歌した能宣の女郎花詠は、「あやなく」という語も共通することから貫之詠をふまえていると考えられる。とすれば、能宣詠は女郎花の色のおもしろさのみならず香をも詠んだ可能性も考えられよう。

一方、梅の花は、香が詠まれることが多く、能宣以前にも次の有名な歌がある。

宿近く梅の花植ゑじあじきなく待つ人の香にあやまたれけり

(古今集・春上・三四・読人不知)

春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やはかくるる

(同・四一・躬恒)

『後拾遺集』の能宣歌に詠まれている梅の花の「にほふあたり」は、まぎれもなく、古来、芳香で名高い梅の香に満ちた空間である。春の夕暮れの柔らかい薄明の中に馥郁とした香りが漂っているのであろう。「ゆふぐれ」は『後拾遺集』の四季歌に用例が急増する歌語である。『後拾遺集』の仮名序に記された撰歌基準「すがた秋の月のほがらかに、ことば春の花のにほひあるをば」に適う詠とい

えよう。

「にほふあたり」という歌句を、通俊はよほど好んだとみえて『後拾遺集』の夏部にも次の歌が撰ばれている。

またぬ夜もまつ夜もききつほととぎす花橘のにほふあたりは

(夏・二〇二・大式三位)

このように、『後拾遺集』に何首も類似の表現を用いた歌が撰ばれており、しかも、その表現が、既に『拾遺集』に入集する同一歌人の歌に詠み込まれているのである。『後拾遺集』撰者が『拾遺集』をいかに丹念に読んでいたかが分かるのである。

②兼盛と③公任の和歌は『後拾遺集』に急増した山里の詠である。『後拾遺集』に詠まれる山里は『古今集』の山里のイメージとは異なっていることが注目されているが、山里のイメージが変化し始めるのは『拾遺集』からといわれている。すなわち、『古今集』の山里詠では、「春たてど花もにほはぬ山里はものうかるねに鶯ぞなく」(二五・棟梁)、「山里は冬ぞさびしさまさりける人めも草もかれぬと思へば」(三二五・宗于)、「白雪のふりてつもれる山ざとはすむ人さへや思ひきゆらむ」(三二八・忠岑)と詠まれるごとく、「隔絶された」「孤独な世界」「厳しい自然」という山里観が歌われている。『拾遺集』における変化については、小町谷照彦氏や阪口和子氏⁹⁾、笹川博司氏¹⁰⁾が詳しく論じておられる。ここでは『拾遺集』初出歌人の山里詠をあげておこう。

とふ人もあらじと思ひし山里に花のたよりに人め見るかな

(春・五一・元輔)

山里は雪ふりつみて道もなしけふ来む人をあはれとは見む

(秋・二五一・兼盛)

山里の家ゐは霞こめたれどかきねの柳すゑほとに見ゆ

(雑春・一〇三一・嘉言)

一、二首目は、古今集的な山里の寂しさが前提となっているが、人が来る事の

期待感が詠み込まれている点は、古今的な山里観からの展開といわれている。また、三首目の歌は『古今集』の山里観を脱した、叙景的な要素の強い歌といえる。『拾遺集』歌人ではあるが、後拾遺時代に活躍した道済の「ゆきとのみあやまたれつつ卯の花に冬こもれりとみゆる山里」(後拾遺・夏・一七七)に通う詠風といえよう。嘉言の歌は雑春に収められており、『拾遺集』増補歌である点は注意されるのであるが、『拾遺集』増補歌と『後拾遺集』との関係については、後述する。

さて、eの公任の山里詠を比べると、『拾遺集』と『後拾遺集』との撰歌態度が似通っていることがわかる。公任の歌二首に詠まれた山里は、いずれも花や紅葉の美しい場所、自然を觀賞しに訪れる場所として詠まれている。『拾遺集』の「春きてぞ人も訪ひける山里は花こそやどのあるじなりけれ」(雑春・一〇二五)は、『古今集』の歌に詠まれた山里のイメージとは異なっている。そして、『後拾遺集』の歌「山里の紅葉見にとや思ふらん散りはてこそ訪ふべかりけれ」(秋下・三五九)も、また花や紅葉の美しい場所として山里を詠んでいる。この山里観が、『後拾遺集』初出歌人詠に受け継がれてゆくのである。

eの二首はいずれも、そのような山里に住む住人と花や紅葉等の自然とを対比して、都人は山の住人よりも美しい自然を尋ねることを優先するものだという発想によった歌である。そして、『拾遺集』の歌が宿の主の立場から「花こそ宿の主なりけれ」と来客を揶揄する歌であるのに対して、『後拾遺集』では客の立場から「紅葉見にとや思ふらん」と宿の主の心中をおもんばかる歌である。対照的な歌といえよう。

ところで、公任が「山里」という語を好み、多く詠んだことはよく知られている。その中には次のように山里の美的な自然を詠じた歌も数多い。

山里の梅を思ふに雨降ればただにも散らで色やまさらん

(公任集・四)

卯の花の散らぬ限りは山里のこの下闇もあらじとぞ思ふ

(同・六八)

いづこにも秋はきぬれど山里の松ふく風はことにぞありける

(同・八一)

中古中世の私家集の中でも、『公任集』に山里の用例が極めて多いことが知られている。¹²⁾『後拾遺集』撰者が、公任の歌を採歌する際に、家集以外を資料とし

た可能性も指摘されており、「山里の紅葉見にとや」の歌は『栄花物語』や『今昔物語』にも見える歌ではあるが、『後拾遺集』の公任の歌を現存の『公任集』はすべて所収するので、主に家集を資料にしたであろうことが認められている。¹³⁾従って『公任集』に収められている数多の山里詠を撰者は見ていたと推測される。にもかかわらず、山里にすむ人との交流と自然美の観賞を対比して詠じるという『拾遺集』の歌と同様の歌を撰んでいる。『後拾遺集』の撰歌態度が、『拾遺集』の撰歌態度に極めて近いものであったことを物語る例といえよう。

cの「君がきませる」も兼盛が好んで詠んでいる表現であるが、他の歌人の詠には、ほとんど例を見ない表現である。兼盛以前の例としては、次にあげた類似の表現が見当たる程度である。

紐鏡のとかの山のたがゆゑか君きませるに紐とかずねむ

(万葉集・巻二一・二四二四)

うつつにか妹がきませる夢にかも吾かまとへる恋のしげきに

(同・巻二一・二九一七)

としがあひにまれにきませる君をおきてまたなはたじ恋はしぬとも

(躬恒集・二五〇)

後世の例としては、次にあげた有房の「梅」の歌や覚性法親王の「雪朝客来」を詠じた歌が見当たりますが、いずれも兼盛詠を意識していると考えられる。

わが宿の梅はたちえもなきものを香をたづねてや君がきませる

(有房集・一五)

初雪の朝に君がきませるはあるじをとしも問ひこざるらん

(出観集・五八三)

また、fの大斎院選子内親王の和歌に用いられた「のり」という語は、勅撰集では『拾遺集』に初出で、『後拾遺集』には四例と増加する語である。『拾遺集』『後拾遺集』ともに、『発心和歌集』という最古の釈教歌集を編んだ選子内親王の歌と語に注目して撰歌したと考えられる。

gの「水の関」と「水の榎」は、好忠の歌にしか見出せない語であり、おそらく漢詩由来の好忠の造語であろうといわれている。¹⁴⁾この好忠の二首については後述するが、各歌人の特徴的な語に注目するという『拾遺集』の撰歌態度を、『後拾遺集』もまた踏襲している例といえよう。

これらの例から、『後拾遺集』が『拾遺集』を如何に熟読していたかが窺えるのである。

4、『後拾遺集』の撰歌と『拾遺集』の増補

前述した例の中には、『後拾遺集』の撰者が『拾遺集』の増補歌についても注目していた例が見出せた。そこで、次に、『後拾遺集』と『拾遺集』増補歌との撰歌態度とを比較したい。とくに、独自の歌境を切り開いた歌人といわれる好忠の場合を取り上げて、『後拾遺集』と『拾遺集』増補歌との関わりを見ておこう。

好忠の歌は『拾遺抄』には三首採歌されていたが、『拾遺集』になると九首と大幅に増補されている。『後拾遺集』にも九首撰ばれている。『拾遺集』の九首の部立を見ると、四季歌二首と雑季四首との合計六首が、いわば四季歌で、その他に別、雑下、恋三に各一首がある。その内、『拾遺抄』に既出する歌は、別、雑下、恋三の三首である。『拾遺抄』には好忠の四季歌は撰ばれていない。好忠の四季歌に注目したのは、『拾遺集』の新たな撰歌方針によるものである。因みに、『拾遺集』を撰集した花山院主催の内裏歌合にも好忠は出詠しており、花山院が好忠の歌を高く評価していたことがわかる。そのため、花山院は『拾遺抄』とは異なる撰歌方針で、好忠の歌を増補しているのである。

一方『後拾遺集』の好忠の歌九首の内訳は、四季歌七首、恋四と雑一に各一首である。四季歌に注目して多くを撰んでいる点は『拾遺集』増補の方針と同じである。撰歌された好忠歌を見ても、『後拾遺集』は、『拾遺抄』よりも『拾遺集』に近い詠風の歌を撰んでいる。

まず『拾遺抄』が撰んだ好忠詠三首から見てゆこう。

① 雁が音のかへるをきけばわかれぢは雲居はるかに思ふばかりぞ

(拾遺抄・別・一九七)

② 我がせこが来まきぬよひの秋風は来ぬ人よりもうらめしきかな

(同・恋上・二八二)

③ わがことはえもいはしろの結び松ちとせをふともたれかたくべき

(同・雑下・五二三)

いずれも伝統的な発想と歌詞を組み合わせたものである。①に詠まれた「雁が音」を聞き「雲居はるか」を「思ふ」と詠む先行歌は少なくない。躬恒の帰雁の鳴く声を聞いて旅立った人を思う歌「雁が音を雲居はるかにきくときは旅のそらなる人をしぞ思ふ」(躬恒集・三〇〇)があり、中務にも、おそらく屏風歌であろうが、詞書に「旅行く人あり、雁なく」と記す「ゆくをただ思ひやらなん雁が音のかへるこゑだにきかぬ雲居を」(中務集・一〇八)の例がある。

②の「秋風」と「来ぬ人」は、額田王の歌「君まつとあが恋ひをればわがやどのすだれうごかし秋の風ふく」(万葉集・巻四・四八八)以来、恋歌の常套的な組み合わせとなったものであり、『古今集』にも有名な同想の恋歌「こぬ人をまつゆふぐれの秋風はいかにふけばかわびしかるらむ」(恋五・七七七・読人不知)がある。

③は、有名な有間皇子の自傷歌「いはしろの浜松がえをひき結びまさきくあらばまたかへりみむ」(万葉集・巻二・一四二)と、この歌による長忌寸意吉磨の歌「いはしろの野中にたてる結び松ころもとけずいにしへおもほゆ」(万葉集・巻二・一四四)をふまえている。好忠はこれらの歌に詠み込まれた「結び松」を用いて、謎合に提出するなどが、解け難いことを念じた歌(詞書には「謎々ものがたりし侍りける所に」とある)に転じている。いずれも、有名な先行歌をふまえて折にふさわしい歌に仕立てられたものである。

三首ともすべて伝統的な発想と歌詞とを組み合わせたものである。とくに②は、独創的な表現を用いた歌を多く含んでいる「三百六十首和歌」の一首であるが、『拾遺抄』が撰んだ一首は、「我がせこ」という万葉的な一語を用いている以外は、独創性の薄い歌といえよう。

次に『拾遺集』に増補された歌五首を見てみよう。五首すべて四季の歌であるが、部立を見ると、秋部に二首、雑秋に三首、増補されている。まず秋部の二首を次にあげる。

④ 神なびのみむろの山をけふみればした草かけて色づきにけり

(拾遺集・秋・一八八)

⑤ まねくとて立ちもとまらぬ秋ゆゑにあはれかたよる花すすきかな

(同・雑秋・二二三)

④の「神なびのみむろの山」の紅葉は『古今集』にも「神なびのみむろの山を秋ゆけば錦たちきる心地こそすれ」(秋下・二九六・忠岑)と詠まれている。ただし、木々の錦だけではなく「した草かけて色づきにけり」と下草の紅葉にまで着眼して詠じている点に、しかも、夏の景物として詠まれることが多い下草を、秋の歌に詠んでいる点に新味がある。

⑤も類歌は多く、「秋の野の草のたもとか花すすきはにいでまねく袖と見ゆらむ」(古今集・秋上・二四三・棟梁)や「さとめてぞ見るべかりける花薄まねくかたにや秋はいぬらん」(貫之集・五一六)等の同発想の歌がある。薄に「あはれ」と同情する点にやや新味がある。これら、秋部に増補された歌は新味の少ない歌といえよう。

ところが、次に挙げた⑥⑦⑧の『拾遺集』雑秋部に増補された好忠の歌を見てみると、古来の伝統的な和歌には見られない新しい歌ことばや表現を用いた和歌が撰ばれていることが分かる。

⑥ 秋風は吹きなやぶりそわが宿のあばらかくせるくものすがきを

(拾遺集・雑秋・一一一)

⑦ み山木をあさなゆふなにこりつめて寒さをこふるをの炭やき

(同・一一四四)

⑧ にほとりの水の関にとぢられて玉もの宿をかれやしぬらん

(同・一一四五)

⑥の「あばら」は好忠が初出であり、しかも好忠が好んで詠んだ言葉である。『好忠集』には次の三例を見出せる。

かこはねどよもぎのまがき夏くればあばらの宿をおもかくしつづ

(好忠集・一五八)

秋風はまだきなふきそわが宿のあばらかくせる蜘蛛のいがきを

(二三九)

ふけるとて人にも見せむ消えざらばあばらの宿にふれる白玉

(四〇六)

「あばら」は「あばら屋」のかたちで以後の和歌に多用され、『夫木抄』の項目ともなっている。また、⑦の「をの炭やき」は白氏の「売炭翁」を踏まえているが、和歌においては好忠が初出である。⑧の凍る池と水鳥の組み合わせを詠んだ例としては、「あさ水とけにけらしな水の面にやどるには鳥ゆききなくなり」(順集・二二二)や「うちとけてねだになかれず人めもるせきのいはみづはやこほりつづ」(惟規集・一九)等が見当たらない。「氷」も「関」もめづらしい語ではないが、「氷の関」の先行例は見当たらない。後述する「氷の楔」とともに、白詩の影響による好忠の造語であるといわれている。

そして、『後拾遺集』の好忠詠もまた、古来の和歌に例を見ない歌語を用いた歌が多い。

三島江につのぐみわたるあしのねのひとよのほどに春めきにけり

(後拾遺集・春上・四二)

「三島江」はすでに『万葉集』に「三島江の玉江のこもをしめしよりおのがとぞ思ふいまだからねど」(巻七・一三四八)や「三島江の入り江のこもをかりにこそ我をば君は思ひたりけれ」(巻一・二七六六)等と詠まれているが、その後、『古今集』『後撰集』には詠まれず、『拾遺集』が前引の万葉歌(一三四八)を人麿歌として再録している程度である。好忠の三島江の歌は、前例のない斬新な春の景色を詠んだ歌として後代和歌に与えた影響も大きい。

また「つのぐむ」は和歌にはほとんど用いられない語である。『人丸集』の国歌に「むつのくに」の歌に例があるが、他には例を見ない。木越隆氏によって漢詩の語から影響を与えられた語、すなわち、『和漢朗詠集』の小野篁の詩文「碧玉寒蘆雖脱囊」等に見られる表現によるものであることが指摘されている。下句の「ひとよ」は七夕の歌に多く詠まれ、恋の歌に使用例が多いが、一夜のう

ちに季節が到来すると詠む発想の先例は見当たらない。

さらに、『拾遺集』増補歌との関係を示す例として注目されるのは、次の一首である。

岩間には氷の楔うちてけり玉るし水も今はもりこず

(後拾遺集・冬・四二二)

この歌に用いられている「氷の楔」については、木越隆氏が、前引した『拾遺集』の好忠歌に用いられていた「氷の関」とともに漢詩由来の造語であると指摘されている。すなわち、白楽天の詩には造語と見られる「氷声」や「氷轍」の語があることから、白氏の造語法にならって好忠が創造した語であるというのである。『拾遺集』の好忠詠を意識して『後拾遺集』が撰歌した例といえよう。『後拾遺集』の撰歌態度は『拾遺抄』よりも『拾遺集』の撰歌態度に近いと考えられるのである。

5、おわりに

以上、『拾遺集』と『後拾遺集』とに共通する歌人の表現には類似の表現が多く見られることを指摘し、それらを比較・考察してきた。その結果、同じ歌人の和歌を撰歌するにあたって、『後拾遺集』は『拾遺集』の撰歌をかなり意識していたと考えられる。

しかも『拾遺集』が増補した歌をも『後拾遺集』撰者は丹念に読んでいたと考えられる例が少なからずあった。また、『後拾遺集』の撰歌態度と『拾遺集』が『拾遺抄』を増補する際の撰歌態度とに相通じる例が見出したことは注目すべきである。『後拾遺集』が、前代勅撰集として『拾遺集』を継承したことが明らかであるといえよう。『拾遺集』における増補編纂は、『古今集』から『後拾遺集』に至る和歌史の展開上に位置づけられるべきであろう。

【注】

- (1) 野口元大翻刻解説「三代集之間事」(小沢正夫編『三代集の研究』明治書院、昭和五六年)による。
- (2) 『日本歌学大系 第五卷』(風間書房、昭和五二年)による。
- (3) 道長から彰子に三代集が贈られた件に「古今・後撰集・拾遺抄、その部どもは五帖につくりつつ…冊子ひとつに四卷をあてつつ」(『新潮日本古典集成 紫式部日記』による)とあるように二十巻本の『拾遺集』を『拾遺抄』と記している。
- (4) 和歌本文の引用はすべて『新編国歌大観』(角川書店)によった。ただし、仮名漢字表記については適宜改めた。
- (5) 『能宣集』(西本願寺本)の序文に「円融太上法皇の在位のすゑに、勅ありて家集をめす、今上花山聖代、また勅ありておなじき集をめす」とある。
- (6) (3)と同書による。
- (7) 小町谷照彦校注『拾遺和歌集』(岩波書店、平成二年)による。
- (8) 石田譲二・清水好子校注『源氏物語 第六卷』(新潮社、昭和六三年)による。
- (9) 『古今集和歌集と歌ことば表現』(岩波書店、平成四年)。
- (10) 「後拾遺集時代の歌枕」、和歌文学論集編集委員会編『平安後期の和歌』(風間書院、平成六年)所収。
- (11) 『山里』の自然美の形成、『平安文学の想像力』(勉誠社、平成一二年)所収。
- (12) 注(9)と同じ論文に指摘されている。
- (13) 上野理『後拾遺集前後』(笠間書院、昭和五一年)に考察されている。
- (14) 『兼盛集』には、他にも「七夕のあかぬ別のかなしきに今日しもなか君がきませる」(一八五)の例がある。
- (15) 木越隆「曾丹集の表現―集中歌の解釈をめぐって」(『国文学 言語と文芸』七八号、昭和四九年五月)以下、木越氏の説はすべて同論文による。
- (16) 寛和二年六月一〇日開催の「内裏歌合」に地下ながら召され、三首出詠している。

**The *Shuisho*'s Inheritance in the *Goshuishu*:
A Comparison of *Waka* by the Common Poets**

Faculty of Liberal Arts, Department of Japanese Language and Literature
Shuko NAKA

Abstract

In the old manuscripts, the title of the *Goshuishu* was designated as the *Goshuisho*. Therefore, it has been presumed that the *Goshuishu* inherits the *Shuisho* rather than the *Shuishu*. The detailed comparative investigation of the contents of the three collections has been neglected. This paper inspects the relationship between the *Goshuishu* and the *Shuishu* through concrete analysis and a comparison of waka included in each collection. First, this research points out that the *Goshuishu* highly respects the poets of the *Shuishu* and adopts a lot of waka by them. In comparison waka written by the poets who are selected in all three collections, remarkable similarities of the language of waka are found. Moreover, it is revealed that the *Goshuishu* is influenced by waka which only appears in the *Shuishu*. This paper demonstrates the *Goshuishu* inherits not only the *Shuisho* but also the *Shuishu*.

Keywords: the *Goshuishu*, the *Shuisho*, the *Shuishu*, Yoshitada, Yoshinobu